Research Report of the Research Institute of Industrial Safety, RIIS-RR-86, 1986. UDC 621.6.04:662.5:684.041

# 配管中における粉じん流の最小発火エネルギーに 及ぼす空気速度の影響

# 松 田 東 栄\*

# The Effect of Air Velocity on Minimum Ignition Energy for Flowing Dust-Air Mixtures in a Tube

by Toei MATSUDA

*Abstract*: In pneumatic transport system of combustible dusts, a dust explosion could be propagated extensively throughout the system by the presence of conveying air. Safety concerns are needed in the design and operation of the system.

Experiments have been conducted to investigate the effect of conveying air speed on minimum energy requirements for the electric spark ignition in air flow of cork dust, ABC-resin powder and some other industrial types of dust in a small tube. The dust-air mixtures flowing at air velocities between 10 and 35 m/s were formed in the 4.2 or 5.3-cm in diameter by 13-m -long horizontal steel tube of a suction-type laboratory pneumatic system. Dust was supplied at the air inlet of the tube by a vibratory feeder and optical monitors were used to follow uniformity of the dust concentrations through the tube. The optical transmission data at the cross-section of the 4.2-cm diameter tube, showed for the flow to be well homogeneously dispersed mixtures of dust at the concentrations up to 0.8 kg/m<sup>3</sup>, at which the dust probe showed an upper detecting limit. Therefore, the smaller diameter tube was more suitable for use in these tests.

Ignition was produced with capacitance spark whose energy and duration could be varied independently. At a distance of 6.5 m downstream from the dust inlet, the spark electrodes of pointed steel bars of 2-mm dia. were situated vertical to the flow. A very wide range of phenomena is involved in two-phase flow. With reference to the available data on velocity gradient between particles and gases, tip of the lower electrode was fixed at a height of one-third of the tube diameter from the bottom wall.

First in the preliminary ignition tests, the optimum spark duration and electrode gap width were determined at various dust concentrations and air velocities. The reverse effect of air velocity was found here both for the optimum spark duration and for the optimum spark gap width, since the reported data by other investigators suggest that optimum spark duration reduces and optimum gap width increases with increase in air velocity for gas or liquid spray fuels. The flow condition in the present test were different from that of the earlier studies. It will be also responsible for the effect that the relatively larger chemical time scale for the case of dust flames than gas flames is required.

2

\* 化学研究部 (Chemical Safety Research Division)

At a given velocity, measurements of minimum ignition energy versus dust concentrations were performed using predetermined optimum values of spark gap and spark duration.

The ignition energy decreased rapidly as the dust concentration increased, until it reached the minimum for all the dust. After that, at the lower air velocities the ignition energy increased fairly slowly, but at the higher air velocities it raised sharply with increasing dust concentrations. The optimum dust concentration, at which the minimum ignition energy was given, slightly shifted its value to a lower side with increasing air velocities. Increase in the air-flow velocity markedly elevated the minimum ignition energy of flowing dust-air mixtures in the tube. A more detailed investigation of the flow parameters having an influence on minimum ignition energy in flowing dust mixtures will be required to obtain a fuller understanding of the dust ignition processes in the flows.

From the relation between the ignition energy and the dust concentration, spark ignitability curves are drawn which separates the domain of concentrations and conveying air velocities that are spark-ignitable at an energy level from the domain that is not. Spark ignitability limits were narrowed by an increase in conveying air velocity. At an ignition energy level, the lower ignitability limit was almost not affected, but the upper one extremely shifted its value to a lower side with an increase in air speeds. Eventually they reached a critical extinction air velocity above which flame was no longer propagated at any dust concentrations at that given ignition energy for the dust-air flows in the tube. These ignitability curves validate the previously reported data, which have been obtained using a full-scale pneumatic transport system (7.5 or 10-cm in dia. and 86.6-m long pipes).

*Keywords*; Dust explosion, Pneumatic transportation, Minimum ignition energy, Cork dust, ABS-resin powder.

#### 1. まえがき

可燃性粉じんが浮遊分散して流動するような状況は, 産業界では集塵、空気輸送、流動乾燥など多くの工業 プロセスに存在する。特に、最近粉体にした場合新し い付加価値が創造されることから微粉体あるいは超微 粉体化への技術開発が盛んに行われており、粉体の改 質や粉体表面処理技術などが急速に進展し、化学、電 気、食品、製紙、製鉄業界など多くの素材メーカーで 可燃性浮遊粉じんを扱うケースが多くなっているよう に見うけられる。しかも、これらの粉体の製造プロセ スでは効率及び自動化の要求から、たとえ中短距離で もバルク (bulk) で連続処理される場合が一般的であ り、粉じん流は多くの工業分野に散見できる重要な形 態となりつつある。もとより,可燃性粉じんが空気中 に浮遊分散して発火した場合、ガス爆発同様に、ある いはそれ以上の設備破壊及び労働災害を引き起こして いることは、多くの災害事例が示す通りである<sup>1,2)</sup>。そ こで、このような工程における粉じん流の火災・爆発 危険性を解明することは安全工学上一つの重要な課題 と思われる。

粉じんが流動している配管中のある箇所で発火が起 これば、空気速度の存在により粉体処理システム全体 へ爆発が伝ば拡大され、大きな事故をひき起こす危険 性がある。しかし、管中に電気火花のような発火源(着 火源)が存在したとしても管中の流速が速ければ粉じ ん粒子がそれらの発火源と接触する時間は短くなり、 粒子の発火温度までに加熱されて発火に至る可能性は 極めて小さく,実際上流速が大きい程発火は困難にな るだろうと思われる。それ故、出来るだけ大きな流速 でこれらのシテスムを運転すれば、火災・爆発に至る 発火を回避できるということになるだろう。しかし, どの程度まで空気速度を増せば発火を回避できるもの か、あるいは空気速度を増すことによって確実に発火 を防止できるものか(逆に,流速の増大によって火災・ 爆発が増長されることはないか),などに関する粉じん 爆発における十分な研究は見あたらないように思われ る。

- 94 -



Fig.1 Experimental layout. 実験装置配置図

一方,ガス爆発特性などから当然予想されるように, 爆発特性は一般に燃料濃度依存性が非常に大きい。従って,均一な浮遊粉じん流を形成させることは差し当 たって爆発特性などの基礎データを測定する上で非常 に重要であり,逆に均一な粉じん濃度を達成すること の困難性がガス爆発と較べた現段階での粉じん爆発の 研究の立ち遅れの原因ともなっていることは多くの研 究者が指摘している通りである<sup>3~5)</sup>。

ここでは,粉じん爆発におけるいわゆる消炎管径<sup>4)\*</sup> にも近い小管径の集じん配管中を10~35 m/sの空気速 度で粉じんを流動されることによりほぼ均一な粉じん 流を達成するとともに,その管中での最小発火エネル ギー及び火炎伝ば速度を測定した。その結果,粉じん 流の発火特性を明らかにするとともに発火を回避する ための空気速度の存在について予測し,火炎伝ば危険 性などを明確にすることができた。本報では,粉じん 流の特性とコルク並びに ABS-樹脂を含むいくつかの粉 じんの最小発火エネルギーに及ぼす空気速度の影響及 びそれに関連する限界空気速度などについて報告する。

### 2. 実験

#### 2.1 実験装置

種々の濃度の粉じん流を配管中に形成させる目的で, 真空式粉体空気輸送あるいは集塵配管を使用して発火・ 爆発実験を行った。実験装置の配管を Fig.1 に示す。 直径 4.2(1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>") または 5.3 cm(2")の水平ガス管(水 平部 13 m)から成る集塵配管中において,一端から電 磁振動式粉体供給機(神鋼電機㈱製小形電磁フィーダ) により定量的に粉を供給し,他端の湿式集塵機まで流 動させた。なお,上記の粉体供給機のみでは十分な高 濃度粉じん流が達成できない場合は,更にもう一台の 電磁フィーダを使用しロータリーバルブを通して粉体 を追加供給するようにした。湿式集塵機はベンチュリ スクラバーで,ファンの回転数をインバータで制御す ることにより配管内空気速度を変化させた。

配管一端の粉体供給口から約6.5 m の位置に容量火 花発生電極を設置して配管中の粉じん流の発火源とし た。電極部の配管は,粉じん流及び放電火花や電極状 態,火炎の形成等が観察できるように長さ30 cm のガ ラス管で置き換えた。放電々極は先端を針状にした直 径2.0 mm の鋼棒一対を流れに直角に対向させたもの で,電極間隔はマイクロメータによって調節した。容 量火花発生装置は,10 µs の単位で放電時間を変化でき るもので,内蔵のコンデンサー容量並びに放電抵抗, 充電々圧などを選択することにより,アーク放電火花 エネルギーを変化させた。同装置は,Ballal *et al*.<sup>7~91</sup> が用いた方式と同じもので別に報告した<sup>10,11)</sup>。発火に至 る放電エネルギーすなわち発火エネルギーは放電波形 上の電流,電圧波形の時間積分により求めた。

### 2.2 実験方法

管内圧力は下流に向うにつれて大気圧から次第に減 圧され吸引ブロワー(排気ファン)の位置で最低にな る。平均空気速度 10, 20, 30 m/s における電極部での 大気圧との差圧は、2″配管においてそれぞれ 38, 130, 350 mmH<sub>2</sub>O であった。Fig 2 は平均空気速度と単位配 管長さあたりの圧力損失の関係を示したものである。

-- 95 --

<sup>\*</sup> 消炎距離に類似した自己火伝ぱ不可能な最大配管 径。文献(4)では,ガスの場合 mm の領域であるの に対して粉じんでは cm の領域にある,と記述され ているだけで正確な値は不明である。





2″配管中での圧力損失と空気速度の関係

当然,輸送粉じん量によって圧力損失は増大するが, 爆発範囲に該当する粉じん量は比較的少ない。上図に 示したように,0.70 kg/m<sup>3</sup>のコルク濃度での圧力損失 は空気流だけの場合のそれと大きな差がない。そこで, ここでの空気速度は,粉じんを流さない場合の平均速 度で示し,平均空気速度は熱線風速計及びデジタルマ ノメーターで管内最大流速を測定して求めた。粉じん 濃度は時間あたりの粉体供給量と空気流量から算出し た。

しかし、これは見かけの公称粉じん濃度を表わすに すぎない。粉じん粒子は管壁に衝突しながら空気エネ ルギーで搬送されるので、粒子速度と空気速度は異な り真の粉じん濃度は多少高いと思われる。なお、空気 速度は10~35 m/sの間で変化させた。上限はブロワー の能力による制限である。

ところで、固気二相流は現象が複雑で、管内での粒子と気流測度分布を一般的に求めることはまだかなり 困難であり<sup>12)</sup>、複雑な流れの場のどの位置に電極間隙を 設定すれば良いか判断しかねる。そこで、ここでは下 部電極尖端を最大半径方向で管壁から配管直径の1/3 の高さに固定して上部電極のみをマイクロメーターで 調節することにより、発火に最適な電極間隔を決定す ることにした。

一方,発火の有無は0.5m間隔で管壁に設置したフ ォトダイオードによって検知した。なお,発火実験は 同一条件で10回繰り返し,20%以下の発火確率を限界 データとして求めた。

# 2.3 粉じん試料

実験に使用した可燃性粉じんの主な特性を表1に示 す。コルクおよびABS-樹脂粉じんは優れた分散性,燃 焼性の観点から最もよく使用した試料で,いずれも工 業的品質のものである。粒度分布はふるい分け法,レ ーザー解析及び散乱法を併用して,種々の分布基準間

Types of dust		Cork	ABS-resin	ABS-resin	ABS-resin	Polyethylene	Polyethylene	Cellulose
			(1)	(11)	(Ш)	(1)	(11)	
Mean diameter	(µm)							
mass-weighted	dw	28	74	58	166	21	86	38
surface-area-weighted	ds	14	29	28	95	14	60	21
Specific surface area	$(cm^3/g)$	16,520	3,800	4,300	620	4,120	2,030	6,140
Specific area mean diameter (µm)		20	17	15	130	16	32	8
Density	(g/cm <sup>3</sup> )	0.21	0.95	0.95	0.74	0.92	0.92	1.26
Heat of combustion	(cal/g)	6,450	9,720	9,660	9,480	11,110	11,110	4,470
Moisture	(wt. <i>%</i> )	5.5	0.7	0.7	0.7	0.1	0.1 🐔	3.4
Ultimate chemical analysis (%)								
	С	58.6	85.0	85.4	84.8	85.4	85.4	47.6
	н	7.2	8.8	8.6	7.9	14.1	14.1	5.5
	Ν	1.1	4.5	4.6	6.0	0.1	0.0	0.1
	0	31.4	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	41.7
Hydrogen-to-carbon ratio:H/C		1.47	1.24	1.21	1.12	1.98	1.98	1.39

Table 1 Properties of the combustible dusts. 可燃性粉じんの物性

— 96 —

Cork



ABS-resin (II)



Polyethylene (I)



r



Cellulose acetate



Photo 1 Scanning electron microscope photographs of dust particles at two magnifications. 試料粉じんの走査電子顕微鏡写真(2種類の倍率)

の解析に基づいて平均粒子径を重量分布での表面積平 均径( $\bar{d}_s$ )及び重量平均径( $\bar{d}_w$ )で表した。比表面積 及び同平均粒子径は、島津粉体比表面積測定装置(SS -100 形)で、密度はピクノメーターでそれぞれ数回測 定して平均値で示した。更に、燃焼熱の測定は島津一 熱研式自動ボンベ熱量計で、行った。元素分析は、JISM 8813<sup>131</sup>に準じ外部の分析センターへ依頼した。コルク以 外は熱分解によってほとんどガス化する物質で、酢酸 セルローズ及びコルク以外は酸素をほとんど含まず、 ポリエチレンの燃焼熱はここで一番大きい。ABS-樹脂 は窒素を含むものの発熱量は大きい。

Photo.1は試料粉じん4種の走査型電子顕微鏡写真 で、2種類の倍率でそれぞれ示してある。コルクは薄 片状で他は塊状に見え、コルクの著しく大きい比表面 積と小さい密度が関連することが推測できる。なお、 ABS-樹脂(II)及び酢酸セルローズは冷凍粉砕を行な って表記の平均粒径を持つ試料としたものであるが、 粒径分布はかなり広いことが写真からわかる。

## 3. 粉じん流の特性

火炎検知の目的で管壁に配列したフォトダイオード の一部は,発光ダイオードとともに一対の光透過型粉 じん濃度計として利用した。管中での粉じんの輸送状 態は、ガラス管部で観察した限りではかなり定常的で 浮遊流に見えたが、これを上記の濃度計で調査した。 電極近くの輸送管断面の最大半径縦方向と同横方向で の光透過率を同時測定した例をFig.3,4に示す。Fig. 3はコルク粉じんを供給し始めてからの様子を, Fig.4 は平均、粒径が大きく比較的分散し難いポリエチレン (II) 粉じんの透過率変化をそれぞれ示す。これによる と、時間的にも空間的にも定常的な粉じん流が達成さ れることが分かるが、管内断面での濃度分布は不明で ある。そこで同図に示したようなある断面における垂 直並びに水平方向での光透過率の割合を種々の濃度お よび流速において測定したところ、Fig.5.6のような 結果が得られた。すなわち, Fig.5 では比較的浮遊し易 いコルク粉じんであるにもかかわらず、濃度が高く流 速が遅いほど均一流から縮退した不均一流(管底流)に なることがわかる。これに対して, Fig.6 ではポリエチ レン(II) 粉じん濃度約0.8 kg/m<sup>3</sup>までに対しては透過 率の割合が100%で均一な粉じん流であることが推定さ れる。なお、光透過型の濃度計では粉じん流の均一性 を調べることは可能であるが絶対的な粉じん濃度を求 めることはできないと言われている∜。そのため質量比









— <u>98</u> —



Fig.5 The ratio of vertical direction transmission to horizontal one at a central cross-section of the 2" tube versus the nominal dust concentration of cork flow. 2" 配管断面の水平方向に対する垂直方向透過率の比 とコルク流粉じん濃度の関係



Fig.6 The ratio of vertical direction transmission to horizontal one at a central cross-section of the 2" tube versus the nominal dust concentration of polyethylene (II) in the flow.

> 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>"配管断面の水平方向に対する垂直方向透過率の 比と流れ中のポリエチレン(Ⅱ)粉じん濃度の関係

例型の $\beta$ 線吸収動的濃度計が開発されているものの<sup>14</sup>, ここでの公称粉じん濃度と光透過率との間には Bouguer -Beer-Lambert 則で表わされるよい相関性があった。 ただし、粉じん濃度が約 $0.8 \text{ kg/m}^3$ を越えると透過率 はあまり変化せず、この濃度計の検出限界がこの辺の 濃度にあることがわかった。Fig.6 での透過率比の減少 がこれらの濃度附近で起きるのは、これらの検出限界 によるものであろうと思われる。

以上の Fig.5,6の結果から、2" 配管に較べて  $1^{1}/_{2}$ " 配管中での方が均一流になることからこの管中での濃 度分布を他の粉じんについても調査した。その結果, ここで使用した総ての粉じん試料で同一断面での垂直 方向透過率と水平方向透過率が管軸でほぼ等しく、10 ~35 m/s の空気速度範囲で少なくとも 0.8 kg/m<sup>3</sup> まで の濃度に対して十分な均一流になることが分った。ま た。粉じん濃度と透過率との相関性から見ても  $1^{1}/_{2}$ " 配 管中での実際の濃度は見かけ公称濃度にほぼ等しいも のと判断される。そこで、以下の実験では主に  $1^{1}/_{2}$ " 配 管を好んで用いた。

#### 4. 最小発火エネルギー

#### 4.1 放電エネルギーに及ぼす流速の影響

絶縁破壊中(<10-4ms)の正確な電流,電圧は使用 した測定装置の分解能からみて観測できず、この間の 放電エネルギーは衝撃波などとして伝達され発火には 関与しないものとして、放電エネルギーを求めた。一 方,発火にはグロー放電よりもアーク放電の方が優れ ていることは良くしられているので,8,15),電流密度が 50 A/cm<sup>2</sup> 以下にならないように配慮しアーク放電が達 成されるようにした。しかしながら,放電々流レベル は流速の影響を受けないが、電圧波形は大きく変化す る場合がある。Fig.7 はその一例を示したもので,空気 速度が増すにつれ火花放電経路が流れ方向へ流されて 下流側へ張り出す結果尻上りに放電々圧は増大し、結 果的には放電エネルギーも増大する。その増加の例を, 2" 配管中での測定データとして Fig.8 に示す。このよ うな測定例は数多く報告されているが9,16),曲線の傾向 は流れの場の特性によっても大きく異なる。それは、 放電エネルギーは火花放電経路長さに依存するからで あろう。一方,火花継続時間が短い場合(50 µs)には, 電極間隔が異なるが放電エネルギーは空気速度の影響 を受けない場合もあることがわかる。これは実質上放 電経路が短いばかりでなくある一定の遅れ時間後15)(す なわち,電子-イオンなだれプロセスが開始後)でなけ れば下流側へ流されないこと,によるものと思われる。

以上,粉じん流が存在しない管内流において,放電 時間が長いと火花放電エネルギーは流速を増すことに よってすでに大きく増大する。



Fig.7 Influence of air velocity on spark discharge voltage and current (Gap distance 3 mm, 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" tube). 火花放電電圧および電流に及ぼす空気速度の影響(電 極間隙 3 mm, 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" 配管)





#### 4.2 電極間隔と放電時間

最小発火エネルギーに及ぼす影響因子は非常に多い。 しかも、粉じん雲の最小発火エネルギーの測定にはガ スとは異なった多くの困難が指摘されており<sup>17</sup>,相対的 な値でしか測定できないとも言われている。その中で、 これまでの多くの研究により特に火花放電時間と電極 間隔は最も重要な影響因子であることが知られてい る<sup>7~9,18)</sup>。そこで、種々の条件下で測定したデータを整 理して、最小発火エネルギーが最低値を示す条件での、



Fig.9 Influence of flow velocity and dust concentration on optimum spark duration for cork in the  $1^1/_2$ " tube.

11/2" 配管中コルクに対する最適放電時間に及ぼす流速 と粉じん濃度の影響





最適放電時間および最適電極間隔に及ぼす粉じん濃度 並びに空気速度の影響を、コルク流について Fig.9,10 に示す。これによると、空気速度が大きくなる程最適 放電時間は長くなり、更に最適電極間隔は流速が増す と減少し最小値2mmに漸近する。これらの傾向は、 ガスや滴液の場合とまったく逆の結果をしめす<sup>7~9)</sup>。一 方、最小発火エネルギーの限界値近くでは幅数ミリの 細長くやや暗い火炎が電極下流側に形成されて、消炎 又は爆発に至る場合が多く観測された。これは粉じん 濃度が比較的高く、大きい放電エネルギーを与えた場 合に特に顕著にみられた。

以上の結果は、空気速度が大きい程強い乱れの粉じ ん流の中で粉じん粒子が発火するためには、比較的長 時間にわたってエネルギーを付与しなければならない ことを示している。Fig.11に異なる空気速度における, 最適放電時間と最適電極間隔の関係から描いた最小火 花面積を比較した。一般には、最小火炎核に相当する 容積が発火温度までに加熱されるのに必要なエネルギ ーが最小発火エネルギーに相当するものと考えられて いるが、ここでは便宜上二次元的な面積で示した。こ れによれば、電極間隔の差は余り大きくなく、空気速 度が大きい程電極間隙後流の強い乱れによる冷却作用 を受けるので、より長時間のエネルギー付与が必要に なるのではないかと考えられる。放電時間が長ければ, 火炎核が形成された後のエネルギーは当然周囲へ伝達 され、最小発火エネルギーは結果的に増大する。従っ て,乱れ構造や速度勾配が実験結果に大きく影響する ものと思われるが、気流の乱れは粒子によって著しく 抑制される場合もあるので12,更に流体力学的な構造の 詳細な検討が必要である。また, Ballal et al. 7~9)の実 験と異なって流れの場が均一でないことが逆の空気速 度の影響を与えている一因と思われるが、そればかり では説明がしにくいところから、粉じん粒子の発火に 関連する化学的特性時間がガスや液滴に較べて決定的 に長いことにも原因があると考えられる。

なお,最小発火エネルギー E は雰囲気圧力 P と, $E\infty$  $P^{-n}$ の関係にあり,燃料液滴に対して n=1.3が報告さ れている<sup>90</sup>。ここでの電極近傍での最低雰囲気圧力は約 0.95 atm であり,粉じんに対する n の値は不明である が n=1.3 としても,この圧力による最小発火エネルギ



d=3.0 mm d=2.0 mm

Fig.11 Comparison of minimum spark ignition areas at low and high air velocities.

高・低空気速度における最小火花発火面積の比較

ーの最大誤差は 6.5%である。従って, 真空式輸送管を 使用したことによる測定データへの圧力の影響は, こ こでは小さいと考えられる。 *n*の値は流れの存在によ り急激に小さくなることも報告されている<sup>9</sup>。

# 4.3 最小発火エネルギー・データ

このようにして測定したコルク粉じんの 2″ び 11/2″ 配管中における最小発火エネルギーと粉じん濃度との 関係をそれぞれ Fig.12 および Fig.13に示す。一定の 空気速度では、いずれも粉じん濃度が増すにつれて最 小発火エネルギーは急激に低下してその極小値に達す る。更に濃度を増すと,空気速度が大きい程急激に最 小発火エネルギーは上昇する。空気速度が小さい場合 には、その上昇はかなり緩慢で、しかも11/2"配管中で の方だ低いエネルギー値を示す。管径による測定値の 差の原因は、まず第一に 2" 配管中での粉じん濃度の不 均一性にあることはデータから明らかだろう。すなわ ち, 流速10m/sの場合, 最小発火エネルギーの極小値 を示す濃度は 2″ 配管の方が低濃度側にあり、その後の 濃度増加によって最小発火エネルギーはより急激に高 くなる。これに対して極小値よりも低い濃度側では管 径による大きな差は見られない。これらの例からわか るように,空気速度が低く濃度が高い程,管径による



Fig.12 Minimum ignition energy data for cork at various air velocities in the 2" tube.

2" 配管中の種々の空気速度におけるコルクの最小発火 エネルギーデータ -102 -



Fig.13 Minimum ignition energy data for cork at various air velocities in the 2" tube. 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" 配管中の種々の空気速度におけるコルクの最小発

火エネルギーデータ



- Fig.14 Influece of air velocity and Reynolds number on minimum ignition energy for cork dust in the  $1^1/_2$ " tubes.
  - 1<sup>1</sup>/2" 及び2" 配管中におけるコルク粉じんの最小発火 エネルギーに及ぼす空気速度とレイノルズ数の影響

差が大きくなる。

Fig.14は、コルク粉じんの最小発火エネルギー極小 値を空気速度及びレイノルズ数に対してプロットした ものである。同一空気速度であればわずかな管径の差 によっても最小発火エネルギーは大きく異なるが、同 じデータを気体のレイノルズ数に対してプロットすれ ば、管径が異なってもレイノルズ数が同じであれば最 小発火エネルギーは変らない場合があることを示して いる。それ故、すでに述べたように流れの場は測定し ていないが、管径による最小発火エネルギーの差はこ れらの乱れ特性にも依存しているものと考えられる。

11/2" 配管中で測定した最小発火エネルギーと粉じん 濃度の関係を、コルク以外の粉じん試料に対して Fig. 15にまとめて示す。一部の例外を除いて、コルク粉で んの場合とは異なって最小発火エネルギーの極小値を 中心とした対称的な曲線が多くみられ、発火可能な濃 度範囲はいずれもかなり狭い。Fig.16は、これらの極 小値と空気速度の関係を総括表示したもので、最小発 火エネルギーは空気速度の増大によって著しく上昇す る傾向がある。一方, Fig.17 は空気速度 25 m/s にお ける最小発火エネルギーと粉じん濃度の関係を種々の 粉じんについて再プロットして比較したもので, ABS -樹脂(II)粉じんに対する曲線が最も低い極小値と広 い濃度範囲に対応する。最小発火エネルギーの極小値 を示す濃度は、およそ0.25~0.30 kg/m3 にあり、極小 値はかなり異なるものの曲線の傾向は互いに類似して いる。なおこれらの極小値を示す粉じん濃度が空気速 度が大きくなる程,低濃度側へ移行する原因としては, 空気速度と粒子速度の差異による見かけ粉じん濃度の 表し方にも一因があると思われる。空気速度が十分高 ければ、空気速度と粒子速度の割合は一定値に漸近す る12)。これに対応して、最小発火エネルギーの極小値を 示す濃度も低濃度側の一定値に収れんする傾向が見ら れる。

#### 5. 火花発火限界

前節で述べた,種々の空気速度における最小発火エ ネルギーと粉じん濃度の関係から,一定の発火エネル ギーにおいて火花発火可能な濃度範囲がある空気速度 において規定される。Fig.18は,Fig.12から求まる種々 の発火エネルギーにおける 2″配管中でのコルク粉じん の火花発火限界(または領域)を示す。各曲線の下側 がある火花発火エネルギーで発火可能な領域で,上側 はその発火エネルギーでは火花発火不可能な領域を示





10

10<sup>2</sup>

10Ę

0 <mark>0</mark>

10

e

Minimum ignition energy, E(mJ)

0 L '0

d

Minimum ignition energy, E(mJ)



10

0

0

0.5

Dust concentration,  $kg/m^3$ 

c 25

d 30

e 35

1.0

1.5



Fig.16 Influence of air velocity on minimum ignition energies for different dusts in the 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" tube. 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" 配管中における種々の粉じんの最小発火エネルギ ーに及ぼす空気速度の影響

す。これによると、集じん空気速度が小さい場合は発 火下限界(濃度限界)はほとんどその影響を受けない が、上限界は空気速度が増すと急激に低濃度側へ移行 して究極的にはある発火エネルギー値において上・下 限界が一致する空気速度が存在する。

2" 配管中での粉じん流は高濃度になると不均一流に なるので,発火限界は見かけの粉じん濃度でしか示し 得ない。Fig.19 および 20 に,見かけ粉じん濃度が実 際の濃度に等しいとした場合の 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" 配管中でのコルク および ABS-樹脂粉じんの同様の火花発火限界曲線を示 す。Fig.19 のコルク粉じんでは空気速度が低い程上限 界が高濃度側に大きく拡がるが,ABS-樹脂(I)(Fig. 20)の上限界の拡がりはかなり小さい。しかし,いず れも発火エネルギーに依存する限界空気速度が存在す る。この関係を各グラフから読み取りプロットすると, Fig.21 のようになる。すなわち,十分大きい発火エネ ルギーにおいて限界空気速度は一定値に漸近するよう に思える。ちなみに,1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" 配管中での ABS-樹脂(I) 粉のそれは約 42 m/s である。



Fig.17 Graphs replotted to illustrate the effect of dust concentration on ignition energy requirements for the seven dusts at the air speed of 25m/s in the 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" tube. 空気速度 25 m/s における 7 種粉じんの発火エネルギ ーに及ぼす粉じん濃度の影響を比較するために再プロ ットしたグラフ

安全上は火花発火限界よりも,発火エネルギーに依存しない爆発限界がより重要である。上記と同様に, 発火エネルギーと発火上限界の関係を求めると,上限 界を表す曲線は大きいエネルギーでほとんど平坦になる。同じ外挿により発火エネルギー100 J に対応する上 限界を取り, Fig.18 および Fig.20 において曲線(*h*) でそれらを示した。これらは上記の外挿からその管中 での爆発上限界と実際上みなすことができるように思 われる。なお,最適放電時間および同電極間隔を考慮 して 10 J の火花エネルギーを与えることは実験的に困 難であったので,ネオントランス (9000 V, 20 mA) による着火を試みた。その結果を Fig.18 中に点線(*g*) で示した。この場合には,流速が増すと着火能は急激 に低下するようである。

なお、上記の空気速度と粉じん濃度で規範される発 火限界曲線の傾向あるいは限界空気速度が存在するこ とは、直径 3″ または 4″、長さ 86.6 m の配管中におけ る電気火花着火による爆発実験の結果<sup>19</sup>、並びに Essenhigh *et al*.のガス炎による着火実験結果<sup>20</sup>と一致する。

-104 -



Fig.18 Domains of spark ignitability for cork in the 2" tube at various spark ignition energies. 種々の火花発火エネルギーにおける 2" 配管中流動コ ルクの各流速での火花発火限界

#### 6. 結 語

(1) 出来るだけ均一な粉じん濃度を達成するため, 2″及び1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>″水平ガス細管中で10~35 m/sの集じん空 気速度で可燃性粉じんを流動させたところ,2″配管で はやや不均一であったが,1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>″配管中ではほぼ均一な 粉じん流を達成することができた。

(2) これらの管中での粉じん流の最小発火エネル ギーに及ぼす10~35 m/s間の平均空気速度の影響を検 討したところ,表1に示す可燃性粉じんの最小発火エ ネルギーはいずれも空気速度を増すことにより著しく 増大し,その値は数 mJ から1Jまでの間にある。その 増加傾向は,ガスや液滴に対する影響よりもはるかに 大きい。その理由は,流れの場の乱れ構造などに関係 すると思われるので今後粉じん流の乱れ構造とあわせ て詳細な発火機構の研究が必要である。

(3) 最小発火エネルギーの極小値を示す粉じん濃 度は,空気速度が増すと低濃度側へ移行する。空気速 度10~35 m/s におけるそれらの粉じん濃度は約0.2~0.



Fig.19 Domains of spark ignitability for cork in the 2″ tube at various spark ignition energies. 種々の火花発火エネルギーにおける 1<sup>1</sup>/₂″ 配管中流動 コルクの各流速での火花発火限界

5 kg/m<sup>3</sup>の範囲にあり,その極小値を中心として濃度を 増減させるといずれも最小発火エネルギーは急増する が,流速が小さいと濃度を増加させても最小発火エネ ルギーの増加は緩慢になる傾向がある。

(4) 火花発火における最適放電時間および最適電 極間隔に及ぼす空気速度の影響も、従来のガスや液滴 の場合と異なった傾向を示した。配管断面での速度勾 配や粉じん流の乱れ構造、あるいは粉じんの発火に関 連する化学的特性時間が比較的長いことに起因すると 考えられる。

(5) 最小発火エネルギーの測定データから,火花 発火限界に及ぼす空気速度の影響がわかる。すなわち, 管中の空気速度を増すと最小発火エネルギーが大きく なるばかりでなく,ある発火エネルギーで発火可能な 濃度範囲も狭くなり,究極的にはどのような粉じん濃 度においても発火不可能な限界空気速度に達する。同 様のことは爆発範囲についてもあてはまり,爆発範囲 が消滅する限界空気速度が存在すると推定される。

(昭和61年9月17日受理)

-105 -



Fig.20 Domains of spark ignitability for ABS-resin (I) In the 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" tube at various spark ignition energies.
種々の火花発火エネルギーにおける、1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>" 配管中流動 ABS 樹脂(1)の各流速での火花発火限界



Fig.21 Dependence of critical air velocity on spark ignition enegy for ABS-resin (I) and cork dusts. ABS 樹脂(I)とコルク粉じんに対する限界空気速度 の火花発火エネルギー

# 参考文献

 内藤道夫,松田東栄:粉じん爆発の危険性とその 防止対策,産業安全研究所技術資料 RISS-TN-69
-1,産業安全研究所(1969)

- 2)最近の災害事例については、例えば、松田東栄: 粉体プロセスにおける粉じん爆発・火災の危険性 とその対策、粉体と工業、6、p.27(1986)
- 石浜渉,榎本兵治:粉じん雲の爆発特性実験研究 方法の変遷,安全工学 14 (4), p.195 (1975)
- M.Hertzberg, K.L.Cashdollar & J.J.Opferman: The flammability of coal dust-air mixtures, lean limits, flame temperatures, ignition energies, and particle size effects. U.S. Bureau of Mines Report of Investigations 8360, pp.1~70 (1979)
- S.E.Slezak, D.J.Fitch, H.Krier & R.O. Buckius: Coal dust flame propagation in a laboratory flammability tube. Comb. and Flame 54, p.103 (1983)
- 6) W.Bartknecht: Explosionen Ablauf und Schutzmassnahmen. p.69, Splinger-Verlag. Berlin (1978)
- 7) D.R. Ballal & A.H. Lefebvre: The influence of flow parameters on minimum ignition energy and quenching distance. 15 th Symposium (*International*) on Combustion, p.1473, The Combustion Institute, Pittsburgh, Pa. (1974)
- D.R. Ballal & A.H. Lefebvre: The influence of spark discharge characteristics on minimum ignition energy in flowing gases. Comb. & Flame, 24, p.99 (1975)
- 9) D.R. Ballal & A.H. Lefebvre : Ignition and flame quenching of flowing heterogeneons fuelair mixtures. Comb and Flame 35, p.155 (1979)
- T. Matsuda & M. Naito: Effect of a spark discharge duration on ignition energy for dustair suspension. Particulate systems - Technology and fundamentals. (J.K. Bedow ed.), p.189, Hemisphere, Washington (1983)
- 松田東栄,内藤道夫:木粉類ダスト層の最小発火 エネルギーの検討,産業安全研究所特別研究報告 SRR-82-1,木工機械作業の総合的安全化に関する 特別研究.p.132,労働省産業安全研究所(1982)
- 12) 辻 裕:空気輸送の基礎. p.68, 養賢堂(1984)
- JIS M 8813 (1976):石炭類及びコークス類の元 素分析法,日本規格協会(1984)
- 14) S.E. Slezak & R.O. Buckius : Dust concentration measurement probe using beta attenu-

ation. Rev. Sci. Instrum. 54 (5), p.618 (1983)

- 15) M.Kono, K.Hatori & K.Iinuma: Investigation on ignition ability of composite sparks in flowing mixtures. 20 th Symp. (*International*) on Combustion, p.133, The Combustion Institute, Pittsburgh, Pa. (1984)
- 16) C.C. Swett : Spark ignition of flowing gases. NACA Report, No.1287 (1956) ; C.C.Swett : Spark ignition of flowing gases using long-duration discharges. Third Symp. on Comb. Flame and Explosion Phenomena, p.523, Williams & Wilkins (1949)
- 17) M.Hertzberg, R.S. Conti & K.L. Cashdollar: Electrical ignition energies and thermal

5

autoignition temperatures for evaluating explosion hazards of dusts. U.S. Bureau of Mines Report of Investigations 8988,  $pp.1 \sim 41$  (1985)

- 18) 石浜渉,榎本兵治,駒井武,梅津実,東猛,荷福 正治:粉じん雲の着火エネルギーに関する研究
  一実験の方法と火花放電持続時間の影響 I ー,安 全工学 21 (5), p.273 (1982)
- 19) 松田東栄,内藤道夫,豊永克弘,野島康広,小林 誠,清水民生:粉体空気輸送配管中における爆発 危険性,安全工学 22 (3), p.155 (1983)
- 20) R.H. Essenhigh & M.G. Perry, Proceedings of Conf. on Science in the Use of Coal. p.D1, Inst. Fuel, London, (1958)